# 動き出すドキュメンテーション（2）

## ―保育者と保育者の関係と対話をキーワードとして―

○佐藤寛子（お茶の水女子大学附属幼稚園）　小玉亮子（お茶の水女子大学）
髙橋陽子（お茶の水女子大学附属幼稚園）

### はじめに

動き出すドキュメンテーション（1）では、保育者と保護者の関係と対話をキーワードに考察した。子どもを中心にした保護者との対話的関係の構築には、日々、目の前の子どもたちと関わり、保育を共に担い創っていく保育者同士の関係性が欠かせない。そこで、動き出すドキュメンテーション（2）では、訪問したイギリスの幼児学校や、学内の乳児保育施設いずみナーサリーでの実践に学び、本園で工夫を試みた取り組みを紹介する。そこから、保育者同士の対話的関係性に視点を置いたドキュメンテーションの在り方とその工夫について考察を深めていく。

### 保育者間の対話の時間がとれない

本園では、平成 30 年度より入園前 2 歳児からの接続を意識においた教育課程の編成を園の研究の柱に置いている。そのため、学内にある 0 歳児から 2 歳児までの乳児保育施設であるいずみナーサリーと連携し、2 歳児との暮らしを日常とする保育士と一緒に入園当初の子どもたちを迎え入れることを試みた。いずみナーサリーの保育士には、入園式後、約一週間、登園後 1 時間程、T.T(ﾃｨｰﾑﾃｨｰﾁﾝｸﾞ教師)として保育に加わってもらった。短期間ではあったが、その時期は子どものみならず保護者も不安と緊張を抱えた状況にあり、2 歳児の暮らしに馴染みが深い保育者の存在はその場を安定させ、保護者の安心感のみならず私達保育者にも安心をもたらし、入園当初の子どもたちの生活が無理なく始められることにつながった。

一方で、保育者の人数が増えれば増えるほど課題となるのが、保育後の振り返りの時間の持ち方である。何しろ時間がとれない。3 歳児担当の保育者 3 名もそれぞれに勤務体制が異なる上に、ナーサリー保育士は夕方までナーサリーでの保育に従事しており、皆が集まる時間を十分にとることは不可能に思われた。そのような中で参考になるのではないかと思いついたのがイギリス、マデリー幼児学校での保育の振り返りの持ち方である。

### 短時間でも対話的な関係づくりは可能である

イギリスのマデリー幼児学校は、イタリアのレッジョ・エミリア幼児学校の取り組みに触発されつつも自校の子どもたちの生活や育ちに即し、地域とつながる保育の在り方を探究していて、その姿勢に私たちは共感した。特に、2 部制（昼食前に子どもたちが帰宅する午前の部と昼食後から登校してくる午後の部）という制約のある条件下での保育にもかかわらず、子どもたちが帰った後のわずかな時間（二部制なので、一日に 2 回）を利用し、その日の保育を省察し、翌日への見通しがもてるよう工夫している点からは学ぶことが多かった。それぞれの保育者が、保育中に撮った写真、簡単に記したメモ、子どもの作品などを持ち寄り、その日の保育について語り合う。一人ひとりの子どもの気づき、子どもの行為や表現の奥に見られる思考のプロセスなどを口々に話し始め、語られた内容を一人の保育者が絵を描くようにスケッチブックに記録していた。わずか 30～40 分の振り返りであるが、日々重ねているので、説明的な話は必要なく、その日にそれぞれの保育者が気づいたことを端的に語り合い重ね合わせていくことで、翌日何をするか、どう関わればよいかという保育の見通しを共有していく時間になっていた。マデリー幼児学校の実践から、短時間でも対話的な関係性をつくっていくことは可能であることが伝わってきた。それと同時に毎日継続して実施する必要性を改めて感じた。

### 直接語り合うことだけが対話ではない

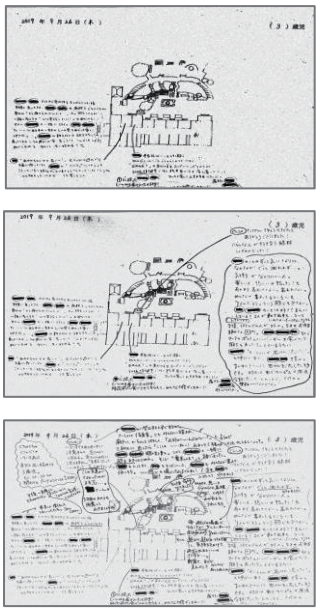
早速、保育後、短時間での振り返りを試みたものの、やはり継続していくことは難しかった。そこで苦肉の策として、メールによるやりとりを行うことにしてみた。保育後、心に残ったことや、その後どうなったのか互いに聞いてみたいことなどを、時間に拘らずに自由に書けるメールは思った以上に便利であった。相手の思いに触れ、自分の感覚を再認識することにもなり、書くことを互いに重ねていく行為の中にも対話的な要素があることが再発見できた。

直接語り合うことだけが対話ではないと感じるきっかけになったもう一つの実践が、いずみナーサリーの「語り合うように書き合う記録」（菊地、濵﨑、中澤、丹羽 2019）である。その日の記録を保育者が一人で記すのではなく、関わった保育者が書けるときに、書きたいことを、書きたいように書き連ねる。何も書きたくない日があってもよく、とかく記録を完成させることに重きを置きがちになる保育記録のあり方を根本から見直すものでもあった。

### 記録を通して対話する～生きた保育記録へ～

これらの学びから、本園では、子どもの育ちや保育者の意識の変化なども含めた、プロセスを記す保育記録の手法を試みることにした。園舎と園庭のマップを中央に載せた記録用紙を作成し、時間のあるときに、書ける保育者がその日の出来事から感じたこと、気になったことなどを自由に書く。いつでも見られる場所に置いておき、別の保育者もまた時間のある時に書く。書かれてい

る内容に触発されて書いたり、別の場面での遊びの様子を書いたり、ペンが進まぬ時、時間のない時には、無理に書かないという選択もありにした。完成度を求めるわけではないため、多少読みづらくはなったが、直接語り合うのは躊躇してしまうような保育の中での悩みや戸惑いなども、書くことで表現できる記録になっていった。翌日、書き重ねられた記録を読み返し、さらに一言付け足して書いてみたり、何日か経って、「なるほどこういうことだったのね」と改めて気づいたことを書き留めたりなど、その日の保育記録はその日だけで完結しない。また、他の保育者が何を書いたのか読むのも楽しみになった。記録を通して、保育の場面が思い浮かび、子どもの様子、保育者の思いが伝わってくることが多くなり、翌日の保育につながることを実感している。保育記録がまさに変化する生きた記録になったことで、書くことも読むことも無理なく継続している。



変化する保育記録

## ドキュメンテーションに求めること～時間や空間を超えて見えないものを感じあうこと、つながりあうこと～

保育の見える化ということが話題になり、それに伴いドキュメンテーションに光が当たってきているが、そもそも保育は見えるようにしたほうが良いのだろうか？あるいは、見えるようにできるものなのだろうか？

特に本園のように、子どもたち一人ひとりが自ら始めた遊びを尊重し、それぞれの遊びがつながったり、広がったり、形を変えたりしながら、子どもたち同士もまたつながりあい、育ちあっていくことを大切にしたいと考えている保育においては、見える化は困難を伴う。

一人ひとりの子どもたちがそれぞれに思いをもって始めた遊びの一つひとつの意味と、そのことが周りに共振し、つながりあっていく様は、保育の場面には表しきれないほど無数にあり、どこに視点を置くかによってその表し方は様々に変化してくるであろう。見えるようにすることよりも、見えないものをどう感じあい、そこからどのようにつながりあっていくかを考えていくことに、より意味があるように思う。そこで、ドキュメンテーションを、見える化という到達目標に向かい完成度の高いものにすることよりも、子ども、保護者、保育者がプロセスを共に楽しむものにしていきたいと考えた。子どもに関わる保育者や保護者が時間や空間を超えて、直接は目に見えない子どもの思いや育ちに目を向け、感じあい、つながりあっていくことが、子どもを中心に置いた保育の基盤になるのではないだろうか。

## おわりに

今回の二つの動き出すドキュメンテーションの試みは、二次元の紙面上で行われた、保育者と保護者の対話、保育者と保育者の対話を試みたものである。ここでは、なんらかの完成を目標にしない、プロセスそれ自体に意味を見いだし、見せることが目的ではなく、対話することが意義あることと捉えられている。

伝える者と伝えられる者、記録する者とそれを読む者が固定されず、相互に入れ替わりながらこのプロセスは進んでいく。対話が進む中で、子どもたちと保育者と保護者との諸関係の中で生起するさまざまなできごとがつながっていく（connect）。できごとが、時間の流れの中で生起してきたこと、そして、生起していくことがプロセスとしての記録の中で見えてくる。

複数の人たちによって記録されていくことによって、できごとが複数の視点からたちあらわれる。記録に用いられたマップや写真は空間の広がりを、継続的に記入される記録は、時間の広がりをもたらしている。

イギリスで見てきた三園はそれぞれに独自の価値とポリシーを持ち、独自の保育を展開していた。マクミラン幼児学校では、マクミランの思想に誇りを持ちながら、一人ひとりの子どもたちの自由で熱気のある活動を支える記録が試みられ、シェリンガム幼児学校では、保育者と保護者との関わり合いを重視しつつ丁寧な記録が試みられており、レッジョに刺激を受けたマデリー幼児学校では、A2 サイズほどもあるようなスケッチブックいっぱいに自由な記録が記されていた。

それぞれに全く異なる記録とドキュメンテーションにインスパイアされながらも、今回の動くドキュメンテーションは、この園の独自なものである。独自なものでありつつも、しかし、海を越えた他の国の記録たちとも緩やかにつながっている。

リゾームというドゥルーズ（2014）の概念を使って、保育の場で生じているできごとの生起とそのつながりを論じたのは、マデリー幼児学校のローイングス校長であるが、今回の記録は、リゾーム、すなわち、「分解可能・連結可能・変更可能な地図」であって、「序列的でもなく意味形成的でない非中心化」されたものであるといっていいだろう。保育の日常の中で「生成変化」するできごとが、「生成変化」する記録の中で、つながり、あるいは、ほぐれていく。今回の試みは、システム化されること、コピーすることを拒否する（リゾーム）、生成変化する記録の試みであると言えるのではないだろうか。

なお、報告「動き出すドキュメンテーション（1）・（2）」はいずれも、国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））浅井幸子研究代表「子どもの育ちと学びの記録による保育評価とその国際的ネットワークの展開」の研究成果の一部である。